



本田：中～後期の水管理と追肥

早場米の水稻は、まもなく幼穂の分化が始まります（早いものは6月10日ころ）。幼穂形成期は環境の影響を強く受ける時期です。そのため、適切な水管理で低温の害を防止するとともに、穂や根の発達を促進します。また、適切な追肥はイネの栄養条件を良くし、穂（もみ）の発達と充実を促します。幼穂分化期から収穫期までしっかりした管理を行い、高品質・多収をめざしましょう。

1. 中干し後の水管理

大事な高温障害対策です！

中干しが終わったら、**間断かん水（入水を止め自然落水とし、田面が乾く前に入水する）を行ないます。**間断かん水は、水稻に水と酸素を十分供給し、幼穂と根の発達を促します。特に、**出穂期前から成熟期までは水を多く必要とする時期**なので、**田面が乾かないように細心の注意が必要**です（水持ちが悪く、乾きやすい水田は湛水管理とします）。**水が不足すると高温障害による乳白粒などが多くなるほか、倒伏しやすくなったりします。出穂後30日まで間断かんがいをを行います。**

※出穂期とは、田んぼの全部の穂の半分ぐらいが出た状態を言います。

2. 冷害対策のための水管理

最近では温暖化にともない、冷害（不稔もみが発生する障害型冷害）の発生は少なくなりました。しかし、梅雨の時期は一時的に気温が下がる時があります。特に、出穂前24日ころと15～11日ころは、低温（17℃以下）に弱い時期です。この時期に**低温が予想されたら、幼穂が水の中にかくれるくらいの深水にして、幼穂の周辺が17℃以下にならないように保温する**必要があります。特に、「**にじのきらめき**」は低温に弱いので、**注意が必要です。**

3. 追肥（穂肥）

大事な高温障害対策です！

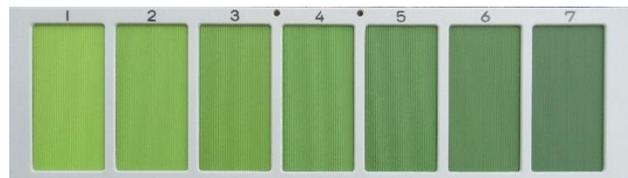
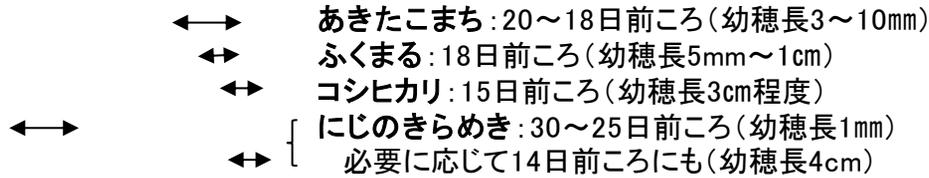


写真 葉色板

← 実際の色とは少し異なります。

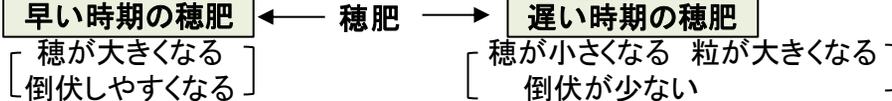
品種別追肥時期の目安（出穂期前）



出穂期までの日数

30日 20日 10日 0日（出穂期）

穂肥の時期がイネに与える影響



イネのようすと穂肥の時期



「安心イネつくり（山口正篤：農文協）」および茨城県普通作物栽培基準を参考に作成

図 穂肥時期の影響と施用の考え方

穂が出るころ稲体のチッソが少ないと、乳白粒が多くなります。穂肥はイネに栄養（チッソ）を供給することにより光合成能力を高め、品質・収量を向上させます。穂肥は施用する時期で効果が違ってきます。出穂期に対して早い時期の施用は穂が大きくなります（もみの数が多くなります）が、玄米は小さくなりがちです（千粒重が軽くなります）。また、早い時期の穂肥ほど倒伏しやすくなります。それに対して遅い時期は、穂が小さくなります（もみ数が少なくなります）が、玄米は大きくなります（千粒重が重くなります）。以上のことから、品種の特性に合わせて追肥適期の目安（出穂期前日数）は図のように決められています。幼穂の長さを参考にして出穂期を予想し時期を決めます。その時の幼穂長は図を参考にしてください。

施用量の基準は、「コシヒカリ」は10aあたり窒素1～2kg、「あきたこまち」、「ふくまる」、「にじのきらめき」は2～3kgです。「にじのきらめき」は、必要に応じて出穂14日前に1～2kgを追加で施用します。

穂肥の施用は葉色板で4.0程度が適切です。しかし、イネの生育状況に合わせて施用時期や量を調整します。生育が旺盛で分けつが多く葉色が濃い（葉色板で4.5以上）時は基準の施用時期より遅くし、施肥量も少なめにします。葉色が淡い（同3.5以下）時は施肥時期を早くし、量も多めにします。「にじのきらめき」は葉色が濃いめの4.7位で追肥できます。1回目追肥後2回目の追肥は、葉色4.7程度であれば施用できます。なお、**全量基肥肥料を使用した場合、原則として穂肥は施用しません。**

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。